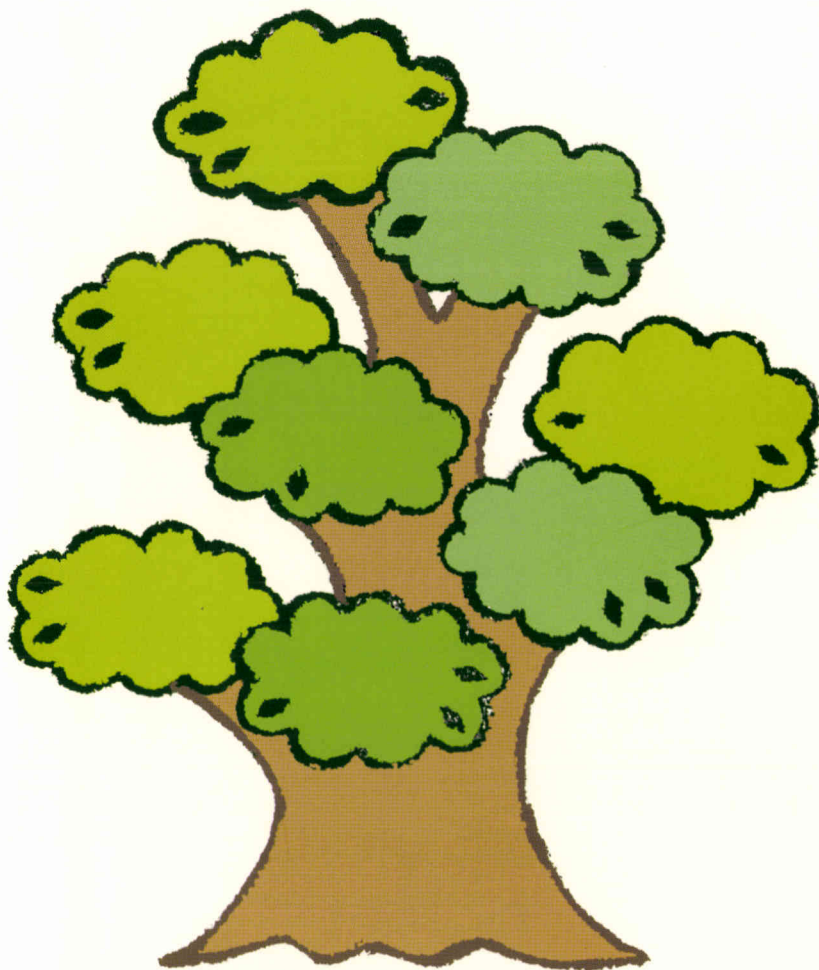


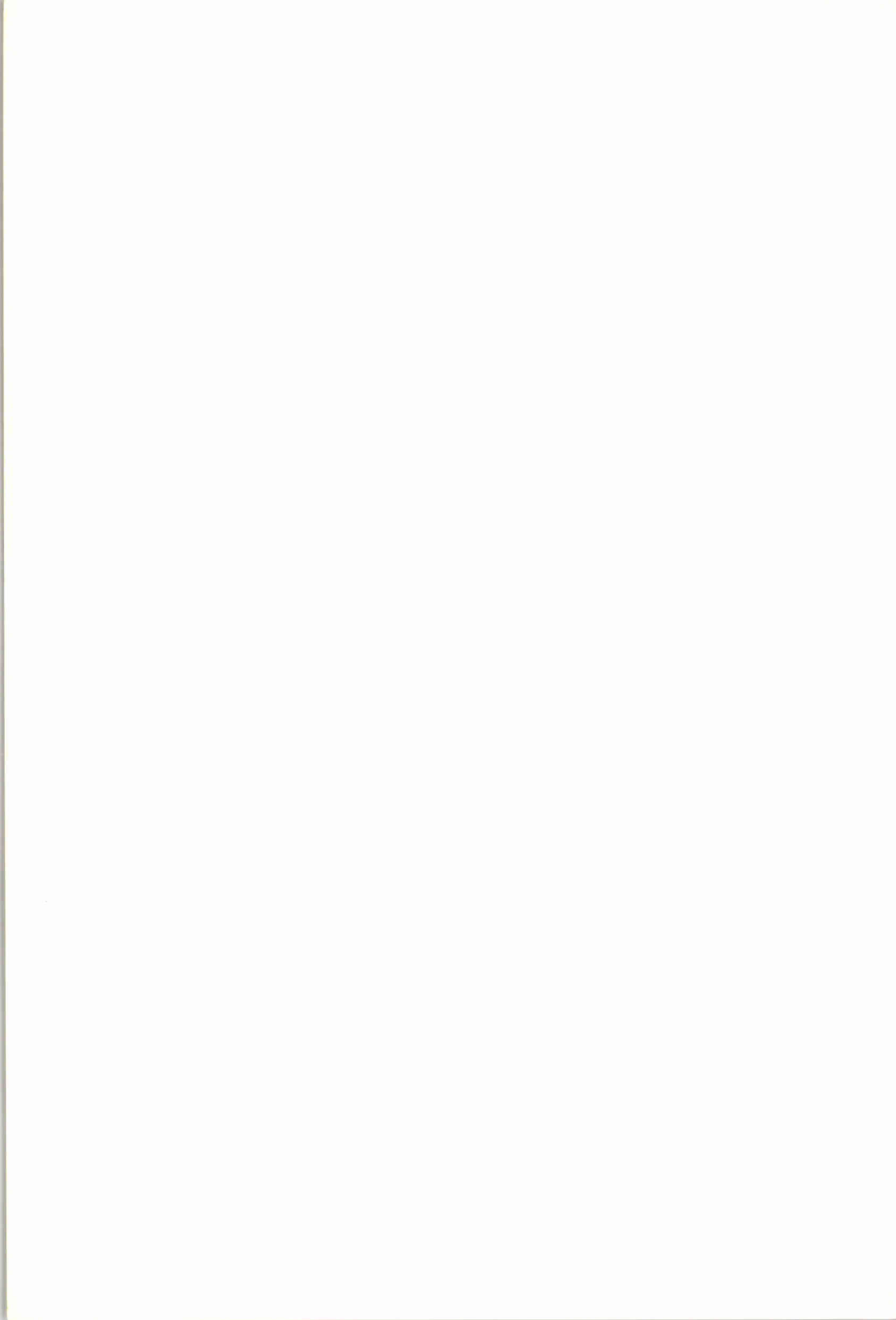
神の民
LAOS講座 創刊号



「信徒として生きる」



日本福音ルーテル教会



神の民 LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化

⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア

⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念

③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること

⑤教会の歴史

初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
JELCの歴史
自分の教会の歩み

②説教の聴き方・語り方

聖書日課（バリエー）の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会

④「聖書」とその読み方

「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート

①礼拝の意味と実践

教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
公同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

礼拝共同体

家庭と社会

宣教共同体

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

1971

もくじ

★目次	1
★LAOS講座へのお招き	
(信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう)	2
I 誰だろう、何だろう、信徒って	5
・はじめに	6
・1. 聖書に見る教会：「神の民」、「キリストの体」	8
・2. ルターの強調：全信徒祭司性	12
・3. わたしたちの教会のアイデンティティとミッション：信徒としての関わりと責任	16
・4. 信徒と教職の関係	24
・5. では、具体的にどう生きるか	26
II 信徒についての神学的・聖書的展望	29
・まえがき	30
・初代教会における信徒	32
・信徒と宗教改革	34
・現代の教会における信徒	41
★あとながき	46

神の民
LAOS講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。——これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

わたしたちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことでほんとうの形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4：19）、その日までともどもに信徒として成長していきましよう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たという

わけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」(フィリピ3:12)。

神の民 LAOS (ラオス) として

PM21の第2プロジェクト(P2)の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS講座」と名づけました。LAOS(ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウー)という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教會的信仰また生き方を目指している点です。LAOSという言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教會の中心であり、教會そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのような生き方を体得していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教會の輪の中で

「LAOS講座」の第一期の学びは別掲の「LAOSの樹」にそのカリキュラムが載っています。そこに描かれている8つの単元が順次刊行されていきますから、その冊子を購入していただき、なるべく教會の集まりの中で、つまり礼拝の前や後の信徒の学びの会や、壮年会や婦人会また

青年会などの集会で、あるいは、地域集会や修養会などの機会に、さらには、地区や教区の夏期学校やセミナー、信徒会などさまざまな場を生かして、信徒仲間と語り合いながら学びを深めていただくことをお勧めします。

まず「信徒とは何か」から

その基礎作りとして「信徒とは何か」というテーマで、本冊子が作られました。ここには二つの文章が収められています。一つは「誰だろう、何だろう、信徒って——信徒として生きていくために知っておきたい5つのポイント」。これはPM21が前提としている信徒論で、書下ろしです。もう一つはアメリカ福音ルーテル教会が発行した「信徒についての神学的・聖書的展望」です。どちらも、聖書と教会の伝統に基づきながら、今日の教会論、宣教論を踏まえて書かれています。

「PM21」を信徒レベルでも広く展開していくために、本冊子に限り全国のルーテルの信徒の方々に無料で配布します。どうぞ、教会の兄弟姉妹と一緒に読み、語り合い、理解を深め、確信を強めてください。きっと牧師先生はよい助けをしてくださるでしょうが、たとえ信徒だけでも、要所要所で聖書を紐解きながら、また共に語り合いながら、学びを進めていってください。そこででの成果を分かち合ってください。そこで得たものを生活の中で生かしていってください。頭でっかちではなく足腰の強い信徒になっていきましょう。そのために、この「LAOS（神の民）講座」が少しでも役に立つことを願っています。

2004年3月

日本福音ルーテル教会「宣教方策21（PM21）」
プロジェクト2（P2）委員会

誰だろう、何だろう、信徒って

信徒として生きていくために知っておきたい5つのポイント

江 藤 直 純

はじめに

「わたしは誰でしょう」などと昔々のクイズ番組の題名みたいですね。今風に言えば「自分探し」、ちょっと気取れば「アイデンティティーの確認」。それはともかく、わたしたちはもちろん知っています、自分が洗礼を受けた「クリスチャン」であること、だから「教会員」であること、別の言い方をすれば「キリスト（教）の信徒」であることを（あるいは、求道者として、いずれそうなるうとしてしていることを）。それは分かっていますが、では、そのことはいったいどんなことを意味するのでしょうか。

名は単なる記号ではありません。名は体を表すといますが、クリスチャン、教会員、信徒という名が表している実体、あるいは本質とはどのようなのでしょうか。そのことは、自分がクリスチャン、教会員、キリスト信徒として自覚的に生きていこうとするときには、やはりきちんと知っておく必要があります。いえ、知らないではいられないのです。

「御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう」（詩編8:5）、これは天地万物の創造主の前で発した旧約の詩人の問いでした。イエスさまがご自身洗礼を受けられたとき、天から聞こえてきたのは「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（マルコ1:11）という声でした。驚くべき受胎告知を受けたときマリアの口から出た言葉は、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ1:38）でした。昔から愛唱されてきた詩編は「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない」（詩編23:1）と羊飼ひと羊の関係で自分自身をとらえ、ヨハネ福音書には「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」として描かれています。

これらのことは私たちも比較的よく知っています。けれども、神さまとわたし、イエスさまと自分自身の関係についてはたくさん聞いていても、**神さまとわたしとわたしの周囲の人々との関係**、あるいはもっと広く、**わたしたちの住む世界との関係**、これも十分に理解しているのでしょうか。信仰というと、つい内面の事柄と考えがちです。また教会生活というように、信仰を生きる場はややもすると、教会という空間や同じ教会員同士の交わりの中だけを思い浮かべがちです。でも、それだけではないのです。神さまは、ずっと大きな舞台の上にわたしたちを置かれて

いるのです。社会の中、世界の中、また歴史の中にといいでしょう。それが神さまのご計画であり、そこで果たすべき使命（ミッション）を与え、そこへと派遣（ミッション）されるのです。そのご計画とは救いの完成であり、また創造の完成といいでしょう。この神さまのわざに参加するようにと召されたわたしたちです。その務めを宣教（ミッション）と呼びます。今回は宣教とのかかわりで信徒とはいったいどういう者かをご一緒に学び考えていきましょう。



1. 聖書に見る教会：「神の民」・「キリストの体」

●教会とは何か

信徒とは誰か、信徒とは何かを考えると、神さまを信じる一人ひとりの人間のことをあれこれ考える前に、**教会とは何かを考えることから始めるのがよいでしょう。**なぜならば、信徒が生み出され、育てられ、養われ、その中で神さまの働きに参与するのは教会においてにほかならないからです。教会とは、この世的には信仰者が集まって作った宗教結社でしょうが、その本質は使徒信条に謳ってあるように「**聖なる公同の／キリスト教会**」であり「**聖徒の交わり**」です。宗教改革以来、ルーテル教会の理解では、教会とは「**全信徒の集まり**であり、その中で福音が純粹に説教され、聖礼典が福音に従って与えられる」（アウグスブルグ信仰告白第7条）ところなのです。

●礼拝共同体・ 宣教共同体

礼拝という言葉の原語が「(神の) 民のわざ(なすべきこと)」だということは、教会が何よりも礼拝共同体であることを示しています。しかし、それは礼拝堂という閉じられた空間の中での信徒の自己完結的な営みではなく、御言葉と聖礼典でもって「福音宣教」がなされることです。ですから、教会とは同時に宣教共同体であるとも言えるのです。礼拝と福音の宣教(ミッション)、これこそが神の民である教会の立てられた目的にほかなりません。

もっと聖書そのものに聴いていきましょう。

●ご自身の民を用いて

神さまはいつもご自身のこの世界での働き、つまり創造と救済の完成へ向けてさまざまなお仕事を遂行なさるために、ご自身の民をお用いに

なるのです。創世記から黙示録までの全聖書が証していることは、まさにそのことです。創世記12章のアブラハムの召命は、単に彼個人を選び出して祝福するというだけではありません。なんと、彼が「祝福の源」となり、「**地上の民はすべてあなたによって祝福にはいる**」という、考えられないような大きな使命（ミッション）を与えられた出来事でした。その子孫イスラエルにもまた「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である」「あなたを選び、御自分の宝の民とされた」と言われ、新約聖書ではそれを引き継ぐ形で教会に向かって「**選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民**」と宣言されているのです。しかも、その目的は「暗闇の中から驚くべき光の中へと招きいれてくださった方の力ある業を……広く伝えるため」なのです。神さまの地上での働きをする器として選び出され、その働きへと派遣（ミッション）されるのです。「**神の民**」、これが旧約以来の伝統に立つ教会の自己理解であり、信徒の群れのアイデンティティー（自分とは何ものか）なのです。

創12:15

申命記7:6

一ペトロ2:9

同前

二コリ5:15

使徒パウロは、救いに入れられた人々、教会員とされた信徒たちに向かってこう言っています。「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」と。具体的に言えば「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」、それだけではなく、「また、**和解のために奉仕する任務**をわたしたちにお授けになりました」、つまり、信徒は「キリ

二コリ5:18—20 **ストの使者の務めを果たす**」のです。恵みを与えられた者は、今度は恵みをもたらす者になるというのです。

しかも、特別に選ばれた使徒だけでなく、信徒はみなそうだと言うのです。いろいろな問題を抱えていたコリントの教会に向かってそう言われているのですから、これは当然わたしたちにもあてはまるのです。一騎当千のエリート集団だけでなく、神の民全体は、老若男女、種々雑多な人々の集まりが「使徒」（原語の意味は「遣わされた者」）なのです。「こんなわたしなんかが・・・とても恐れ多い」といって引き下がるのは謙遜でもなんでもありません。「主が入り用なのです」と判断なさり選ばれたのですから、素直にお応えしましょう。

マタイ21:3

●キリストの体

エフェソ1:23

パウロが「**教会はキリストの体**」だとの比喻を使っているのも意味深いことです。体である以上「多くの部分」から成り立っています。その総体が神の民としての教会なのです。体全体はその「かしら」であるイエスさまの思いを実現していくために存在します。一つの体ですから「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」、そのような有機的な共同体なのです。信徒とはこのようにキリストの体として生きる者です。ひとつの細胞、一つの部分だけでは生きることはできません。

一コリ12:26

●召し集められた者たちの群れ

新約聖書が書かれたギリシャ語で教会のことをエクレシアと言いますが、その意味は、召集された人々の群れということです。自分から集まってきたのではなく、キリストによって召し

集められたのです。その目的は、御言葉を通して恵みを受け、またその恵みを宣べ伝えることです。だから、教会とは礼拝共同体であり宣教共同体と呼ばれるのです。

〈まとめ〉

神さまはこの世界での救いと創造の完成に向けてのご自身の働きのために、「神の民」また「キリストの体」である教会を召し集められます。教会は、自分自身が御言葉によって福音を与えられながら、受けた福音を周囲へと分かち合っていく務めを託されているのです。クリスチャン、教会員、信徒とはこの教会に加えられた人たちです。教会に託された務めを生きていくのです。

〈話し合いのために〉

- ① 「教会はキリストの体」と言うとき、あなたはどのようなイメージをもちますか。
- ② 私たちが共に集まることの意味、また、世に遣わされていることの目的を考えてみましょう。

2. ルターの強調：全信徒祭司性

●すべてのキリスト者は祭司

マルティン・ルターは16世紀の宗教改革の中で、「万人祭司」、正確には「全信徒祭司性」という非常に大切な原理を提唱しました。あたかも聖職者が教会であるといわんばかりの認識があったそれまでの教会に対して、聖書が教える教会の本質から出てくることは**すべての信徒が祭司としての性質をもつ**ということでした。「要するに、すべてのキリスト者は祭司であり、すべての祭司はキリスト者である」「キリストが祭司であるゆえに、キリスト者は祭司である」とルターは言っています。信徒の本質を祭司であることだと捉えているのです。

祭司の役割が**民のために神に執り成し、神の御心を民に取り次ぐ**ことであるので、ルターは御言葉の奉仕、つまり教えること、説教すること、また、洗礼を授けること、聖餐をささげ、もしくは執り行うこと、罪を帰したり赦したりすること、他の人たちのために祈ること、捧げものをする事、あらゆる教えと霊について判断を下すことを挙げています（「教職の任命について」）。**この務めが教会に託されている**のです。（ここで、信徒は誰でもいつでもどこでも礼拝の中で説教壇から説教してよいという結論を導き出しているわけではありません。制度としての全信徒祭司「制」の主張ではありません。この点については後述します。）

●兄弟姉妹相互の会話によってキリストがもたらされる

シュマルカルデン条項というルターが書いたルーテル教会の信条によれば、福音は第一に、福音の本来の役目である罪の赦しが、口で語られる説教の言葉によって、第二に洗礼によっ

て、第三には聖壇の聖なる sacrament（聖餐）によって、第四に赦しの宣言によって、「また兄弟姉妹相互の会話と慰めによって」豊かに与えられると述べられています。兄弟姉妹相互の会話と慰めによってという表現の中にも、**日常の社会生活の中での信徒の役割の重大さが簡潔明瞭に言い表されています。**ボンヘッファーが、キリスト者にとって信仰の兄弟姉妹とは、**神さまの現臨のしるしであり、互いにキリストをもたらず存在だ**と言っているのと同じことでしょう。

●宣教への使命と賜物を授かる

20世紀後半の教会史上画期的な出来事である第二ヴァティカン公会議で発布された「信徒使徒職に関する教令」の中で、ローマカトリック教会は、全世界をキリストへと向けるための教会の働きの一切を「使徒職」と呼び、「**教会はこの使徒職を全肢体を通じ、それぞれ異なった方法によって実行する。事実、キリスト者としての召し出しは、そのまま使徒職への召し出しである**」と言明しています。ルーテル教会が大切にする万人祭司つまり全信徒祭司性とあい通じる考え方だと思います。**すべてのキリスト者は洗礼によって宣教への使命と賜物とを授かっている**とわたしたちは理解しています。

●宣教へと整えられて

信徒たちをこのような祭司として、また使徒職の生き方へと招き、養い、整えるために、わたしたちは、日ごと週ごとに「みことば」（聖書日課や説教、聖礼典など）をいただきます。さらには教育と訓練にあずかります。そのための奉仕者が、教会によって専門の訓練を施され、認められ、務めを託された教職です。その

しるしとして按手を受けます。「**聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストの体を建てさせ**」るのが、つまり宣教へと信徒を整えるのが、教会の霊的専門職である教職の存在理由です。

教会によって訓練と認定を受け、正規に招かれた信徒が、その教職の指導と責任のもとで、共同の礼拝において説教という奉仕をすることに、ルーテル教会が踏み切ることが、いま真剣に考えられています。これまでの「止むを得ない穴埋め」、いわば野球でいう「代打」という消極的位置付けから、信徒もまた神の言葉を語るという理解のもとに**積極的に霊的な奉仕**をしていく道筋が切り拓かれようとしているのです。

●社会と教会に 生きる信徒

わたしたちは、この全信徒祭司性という原理にのっとって、信徒の特性である社会に生きる存在（世俗性、この世性）として**この世の中での証しと奉仕**に励むと共に、礼拝共同体であり宣教共同体である**教会の中での与えられた賜物を用いての奉仕と証し**の務めに励みましょう。

社会の中で、と言いました。99%の隣人たちが生きているこの世こそ、信仰の実践の場にほかなりません。隣人たちと生活を共有しているからこそ、彼らの喜びも悲しみも共感でき、ふさわしい言葉と行いでキリストの福音を伝えることができるのです。それが信徒であることの務めであり特権なのです。

同時に、教会の中で、とも言いました。教会とは何かというよりもむしろ、**教会とは誰か**と問うようにしましょう。客観的な、第三者的な知識を知れば終りではありません。このわた

し、わたしたちにとって、教会とは何かを問うことは、とりもなおさず、教会とは誰かと問うことです。そのとき、おそれおののきつつも私たちは告白するのです、わたしたちが教会です。そうであるなら、教会の務めはわたしたちの務めです。教会の責任はわたしたちの責任です。教会のなすべき奉仕と証しはわたしたちのなすべき奉仕と証しです。礼拝も宣教もわたしたちの責任であり特権なのです。

〈まとめ〉

洗礼を授けられた信徒はみな「祭司」としての性質を神さまから与えられています。民のために神の御心を取り次ぐことと、神に執り成すことの両面があります。教会の務めであり、信徒の務めです。共同体全体に豊かに与えられているさまざまな霊の賜物を存分に生かすことを考えましょう。

〈話し合いのために〉

- ① 「祭司」として私たちにはどのような働きができるでしょうか。
- ② 信徒同士が互いに牧会しあうことの具体例を話し合ってみましょう。

3. わたしたちの教会のアイデンティティーと ミッション：信徒としての関わりと責任

●教会の使命

教会の本質は二千年前から変わりません。その変わらぬ本質が具体的な特定の時と所、時代と状況の中で具体的な特定の姿を取ります。21世紀に入ったこの日本でどのような姿、あり方をとり、課題を担うのでしょうか。それを2002年の総会が採択した日本福音ルーテル教会の「宣教方策21」（パワーミッション21：略称PM21）は、こう選び取りました。わたしたちの教会の使命とは「福音に生き、社会に仕え、証しする」ことだと。

●罪赦され、恵みへの感謝として

福音に生かされて生きる、このことが基本です。十字架と復活によって罪を赦され、命が贖われたことを信じ、教会に加えられた者が、その大いなる恵みへの感謝として、生活の全領域においてキリストに従って生きることです。

そこに立ちながら、信徒はそこから押し出されて、社会に仕える、具体的には社会の中で正義や平和や愛の実現を求めながら困難の中にある人々に奉仕することを目指します。この奉仕の働きは、言い換えれば、神の国が完成するまで続けられるキリストのわざに参与することです。

さらに、信徒として生きるということは、言葉と行いによって、さらにはその存在そのものをもって、この世に対して、また特定の一人に対して、キリストを証しすることを自らの務めとすることです。言葉によってと言うときに、語ることは当然ですが、その前に聴くこと、言葉にならないうめきも含めて、相手の声に心と

耳をひたすら傾けることも、ときとしては語る
こと以上に大切な奉仕になります。そのうえで
神の愛とキリストの平和を相手にとって最もふ
さわしい形で伝えることで証しするのです。

この「福音に生き、社会に仕え、証しする」
ことは取りも直さず「宣教する」ことへと展開
しますが、その宣教ということをさらに具体的
に性格付けた8つの文が「PM21」の中にあり
ます。ここに書かれていることはわたしたちの
教会の共通の課題であり、責任です。というこ
とは、それをそれぞれの信徒が属する各個教会
の置かれた状況の中で実体化することがわたし
たちの課題であり、責任です。

●包括的な宣教理解

PM21は先ずこう言います。

- (1) 私たちは、日本人と、日本に住む外国
人の救いと、その人々が必要とする魂
の癒しと、人間らしく生きるために必
要なことのために働く、「宣教する教
会」になろう。
- (2) 私たちは、世界の一部として、とくに
アジアの国に属するものとして責任を
担う、「宣教する教会」になろう。

ここでは伝統的にキリスト教会が理解してき
た罪の赦しと神との和解、永遠のいのちの約束
といった「救い」を大切に保持しています。同
時に、生きることが多くの困難を伴う状況の中
で、悲しみや痛み、孤独や不安に呻吟している
人にはとくに魂の癒しをもたらすこと、また、
人間としての尊厳が保たれないような環境に置
かれている人たちにはその回復のために働くこ

とが、神さまの福音宣教の大切な一部だとの認識を示しています。その人々とは日本人だけではなく、この地に住む外国人も当然のこととして含みます。たとえ、見えにくい存在であっても。また、国内だけに目を向けるのではなく、この地球に住むすべての人に、とくに同じアジアへの関心と責任を持ち続けることを決意しています。

●恵みの福音を伝え、
伝道・教育・奉仕する

- (3) 私たちは、この時代と社会に生きる人々に、主イエス・キリストの十字架と復活によって一方的に与えられた神の恵みの福音を伝える、「宣教する教会」になろう。
- (4) 私たちは、キリストの範にならって伝道・教育・奉仕の働きと交わりに励む、「宣教する教会」になろう。

ルーテル教会は伝統的にイエス・キリストを救い主また模範として仰いできました。福音の中心がぼやかされてはなりません。**先行する一方的な恵み**なのです。それと同時に、主イエスのガリラヤでの活動に鮮やかに見られる**伝道・教育・奉仕あるいは癒し**とそこから生み出される**交わり**という包括的な宣教です。これを今日のわたしたちも継承すると宣言しています。

そのためには、根は一つでありながら、戦後の国の方針で法人が別々にされた宗教（教会）、教育（キリスト教学校）、福祉（社会福祉）法人たちが宣教共同体（るうてる法人会連合）として出発し、力を合わせていく態勢を作りつつ

あるのです。これは全体教会のことだけでなく、各個教会でもまた起こることです。

●ルーテルらしさ、
そして諸教会と共に

- (5) 私たちは、ルターの宗教改革が標榜した「恵みのみ」「信仰のみ」による信仰義認の教えに固く立ち、神のみことばに聴き従い続けるために「聖書のみ」を重んじる、「宣教する教会」になろう。
- (6) 私たちは、ルター派の伝統に立ちつつ、エキュメニカルな流れの中で、国内また世界のルーテル教会と連帯する、「宣教する教会」になろう。

ルーテル教会の神学といえは信仰義認論の一枚看板、それ一本槍ですが、その遺産は正當に継承していくことは自明のことです。キリスト教会全体に対してそれをもって貴重な貢献をしてきましたし、引き続きそうしていくのです。

同時に、自分の信仰的、神学的特徴は大切にしながらも、すでにカトリック教会や聖公会など異なる伝統の教会とも、国内でも世界のレベルでも、長年にわたり対話を積み重ね、協力の道を開いてきました。また、日本キリスト教協議会(NCC)への関わりや、地域での教派を超えた諸教会との**宣教と奉仕の面での協働**にも貢献していく方針も堅持していきます。課題によっては、キリスト教の枠を超えた諸宗教間での対話と協力も必要な時があります。

言うまでもなく、同じ伝統に立つ世界の諸ルーテル教会とルーテル世界連盟(LWF)との交わりと協力はますます大切にしていこうと

す。エキュメニカルな運動において、お互いがお互いを必要としています。出会いの中で相互に豊かにされていきます。

エキュメニズム（教会一致運動）は個性を無くしてしまうことではなく、多様性の中の一致こそ目指すべきものです。ルーテルの個性を保ちながら、他に開かれた教会でありたいのです。

地域社会の中で少数者として信仰生活を守り、証しと奉仕を有効にしていこうと努めてきた信徒にとっては、教派の壁を越えて協力し合うことは当然のことかもしれません。それと合わせて、ルーテルの特徴とは何かを学ぶことも大切です。

●礼拝を中心に、
すべての人に開かれて

そして、わたしたちの属する教会自身のこと
に関してこう言います。

- (7) 私たちは、神の民へと召し集められた信徒の群れとして、みことばと聖礼典を中心とする礼拝に養われ、証しと奉仕のために自らを整え成長させ、世へと派遣される、「宣教する教会」になろう。
- (8) 私たちは、全年齢層にわたり、さまざまな個性と賜物を与えられた人々から成る信仰共同体で、すべての人に開かれ、とくに次の世代への伝道と信仰継承を目指す、「宣教する教会」になろう。

ここには、あくまでも御言葉と聖礼典を核とした礼拝を中心とすることの確認があります。

けれども、自分が礼拝して内的に満たされたらそれで良しとして終わるような信仰の姿勢とは無縁です。召し集められ、**恵みを受けたら、派遣される**のです。

しかし、派遣され、しかるべき成果をあげるためには、それなりの**訓練**が必要です。学校の勉強は言うに及ばず、ピアノにしる俳句にしる野球にしるどんな芸事もスポーツも練習しなければ力を発揮できません。発揮する力さえ蓄えることができません。こんなときに「ありのまま」でいい、という言葉を持ち出すのは場違いです。証しと奉仕のために自らを整え成長させることの必要性をここで認識しています。

全体教会は先頭に立って、各個教会でも教区でも信徒の信仰生活成長支援プログラムの開発と実施が強く求められます。(PM21のP2「証しし奉仕する信徒になる」プロジェクトはまさにそのためです。)

●すること、 そして、あること

訓練とか練習とかと言うと、やはり教会でもそういうことができるように強く優秀でなければならないのかといった誤解を与えるかもしれません。いいえ、もう何もできなくなったと思いついでいる**寝たきりの高齢の兄弟姉妹**に「**祈りという最高のわざ**」がまだ残されていることを告げたいものです。

また、ただベッドで眠るだけのいたいけない幼な児は、**ひたすら主に信頼しおすがりすること以外何もできない者**にもまた、神さまは限りなく恵みを与えてくださり、守り支えてくださるということを、**存在するだけでよいと身をもって証し**しています。そのことを感謝しましょう。

●多様性あるれる 共同体を

教会はどのような人たちから構成されているのでしょうか。具体的な各個教会が目指すのは、神の創造の世界が凝縮されたような、豊かな多様性溢れる共同体です。しかし現実にはかなり構成員が偏っています。排他的な傾きがないかどうかも自己吟味しなければなりません。年齢の幅も、性別も、国籍も、また身体や心の状態も性のあり方もさまざまな人々がそれぞれを**貴重な個性として喜んで出し合い、受け入れあう共同体**でありたいのです。偏見や差別、争いに満ちた現実の世界が、それを見てこんな風になりたいと思うような共同体を形成していくことは私たちへのやりがいのあるチャレンジです。

それだけではなく、二千年営々と継承してきた信仰、とくにこの国で守り抜いてきた**福音信仰**を次の世代、若い人たち、幼い子どもたちにも意味あるものとして伝達していくことは、全国の教会の、ということは私たち信徒の、最優先の課題の一つです。

●担い手は“あなた”

宣教方策の序文はこれらの教会の自己理解と使命、ということは、信徒の自分は何者であるかという理解（アイデンティティー）と使命（ミッション）の結びに、「**新しい宣教方策が豊かな実を結ぶことができるとしたら、その担い手は、“あなた”、一人一人の信徒、一人一人の牧師・教師、学校・施設の関係者である。主イエス・キリストによって贖われ、生かされ用いられている一つの神の民として、祈りを合わせ、与えられている賜物と託されている使命とを合わせ、ともどもに主に仕えていこう**」と呼びかけています。

従来のどの宣教方策よりも**信徒の位置と役割が重視**され、どれよりも**共同体としての教会のあり方が強調**されています。それこそ聖書の中の教会像、信徒の姿により近いと思われます。

〈まとめ〉

福音の宣教という教会の務めの本質は変わりませんが、その現われ方は時代と社会によって異なります。21世紀の日本と世界で神さまが求めていらっしゃることをルーテル教会はまとめました。それを個々の地方でどう具体化するか、上記の8つの使命（ミッション）と教会の自己理解（アイデンティティー）に照らして考えてみましょう。

〈話し合いのために〉

- ① 時代が変わっても、教会が変えてはいけないものはなんでしょうか。
- ② 今の日本と世界の状況の中で、私たちにはどのような宣教——伝道や奉仕の働きができるでしょうか。

4. 信徒と教職の関係

●教職の役割

私たちの教会の伝統では、神の民の中に信徒以外の身分の者はいません。教職もまた一人の信徒ですが、専門の教育によって訓練され、教会によって認定され、按手を受けて、**説教と聖礼典の執行という教会にとってなくてはならない重要な機能を担うよう託されます**。見えないみことばとしての説教、見えるみことばとしての聖礼典、いずれも福音宣教の中核です。そうすることで、神の民を養い、新たな信仰者を生み出していきます。もちろん究極的な意味では御言葉を語るのは神ご自身ですが、媒体として用いられるのは人間である教職です。その意味で、教職は教会の伝道牧会、管理運営の責任者になります。

●宣教のパートナー

しかし、忘れてはならないのは、**信徒は牧師の助手、お手伝い、補佐役ではなく、パートナーである**ということです。御言葉が取り次がれる相手であると同時に、**教会としての福音宣教の共同の担い手**なのです。とくに役員に就く人たちの責任の重さは、その就任式の式文を見てみると直ぐに分かります。

しかし、役員だけではなく、**すべての神の民が神のわざに参与する**というのが聖書の伝統です。信徒たちはいまも使徒言行録の第29章以降を身をもって書き続けているのです。もちろん、使徒行伝が聖霊行伝とも呼ばれてきたように、宣教の真の担い手は聖霊なる神御自身です。しかし、その働きは神の民の言葉と行い、その存在をもって繰り広げられていくのです。かれらこそ信徒なのです。

ですから、信徒がそのように整えられ教会の内外で福音宣教の担い手として奉仕できるようになるためには、自己啓発・自己教育と共同学習と同時に、宣教の専門職としての教職が「信徒たちを整えて奉仕のわざをさせ、キリストの体を建てさせ」るための指導と配慮と援助が必要なのです。その意味では、信徒が成長すればするほど、教職の役割が減るどころか、ますます優れた貢献が求められます。御言葉と聖礼典によって信徒を霊的に養い、さらに教会という信仰者の共同体を信徒たちと共に管理運営していくのです。牧師の役割は、「**信徒が教会と社会で証しと奉仕の貢献ができるように力づける**」という言い方がふさわしいと思います。

信徒は教会の一部、ないし、大切な一部ではなく、教会そのものです。礼拝共同体であり宣教共同体そのものです。恵みによってすでにそうされているのだから、その恵みに応えてますますそうなっていくように努めるのです。

〈まとめ〉

信徒は教職の福音宣教のパートナー、同労者、仲間です。教会に与えられた務めを果たすためにとくに御言葉を説き明かし聖礼典を執行する務めを委ねられた牧師は、また信徒が教会と社会の中でさまざまな証しと奉仕ができるように援助するのです。そのことの中には霊的な奉仕も含まれます。なぜなら信徒もまた神の言葉を語るからです。

〈話し合いのために〉

- ① 教職に期待されること、信徒に期待されることを話し合ってみましょう。
- ② 信徒が福音宣教の同労者として働くために、どのような準備や学びが必要でしょうか。

5. では、具体的にどう生きるか

●教会のわざと信徒がやること

信徒はいったい誰で、何かということについては聖書に立って、また教会との関わりの中で十分に学んできました。信徒として何をするのか、どう生きるのか、よく考えてきました。あとは、実践あるのみです。

そのためにはまず福音宣教のわざを託された教会がなにをするべきなのか、どう生きるべきなのかに目を向けましょう。そのうえで、それらのわざのうち信徒がやること、できること、なすべきことをひとつひとつ具体的に考えていきましょう。そのなかには、祈りと御言葉の奉仕もまた含まれているでしょう。

信徒一人ひとり小さく弱い存在のように思えても、みことばあるいは福音は大きく強いのです。信徒の日常生活の中での言葉と行い、また存在そのものが、キリストが救い主であることを証します。それだけでなく、信徒が体現し、また指し示す福音的な原理——たとえば、どのような条件のもとにある人も、一人の例外もなくそのいのちは尊いとか、神と隣人を愛することが最も重要であるとか——が社会に浸透していき、福音によって秩序づけられていくことを信じ、目指すのです。

ですから、週日には教会はどこにあるのかと言えば、散らされ遣わされている**信徒たちがいる社会の中に教会はある**のです。

社会の中で、キリストの体である教会に託されていることを具体的な状況の中で考えていきましょう。その中で、実際に社会の中で生きている信徒がやれること、やるべきこと、行動と生き方を振り返りながら考えてみましょう。

教会がなすべき神賛美は、わたしたち信徒みんながなすべきこと。世界の人々のためのとりなしは、信徒みなのこと。みことばを語り伝えることもそうであり、愛と奉仕の実践もまたそうなのです。

●ひとりだけではなく
体全体で

ただし、心に留めておきたいことは、教会のなすべきさまざまなことを、一人の信徒がすべてやらなければならないことはないということです。もしも「すべて」しなければならないなら、どんな有能でエネルギッシュな人でも、課題の大きさに疲れ果て、潰されていくでしょう。

安心してください。教会はキリストの体です。聖書にあるとおり、手も足も目も鼻も耳も口もいろいろな内臓も、そして小指の爪先までも、それぞれがなくてはならない役割を分担しており、また体全体で、キリストがこの世界でなされる働きを、力を合わせて実践しているのです。

このことは、信徒一人ひとりについても言えることですし、各個教会についても同じことが言えるのです。一つひとつの教会で教会に期待されているあらゆる務めを実行できなくても、教会全体で（日本福音ルーテル教会として、また、もっと大きいキリスト教会、公同の教会として）担っていくのです。

ただ、大切なことは、体の各部分が体全体の働きを知っており、体全体の一部としての自分自身であることを自覚していることです。そこにあたたかい血が流れ、神経が通じ合って、他の部分との互いの連帯感、尊敬や感謝の念を持ち、また、励まされ合うことが大事です。

信者が生き生きとすれば教会は生き生きとします。「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」とイエスキリストはおっしゃいました。ニナルではなく、デアルと。この意味はとても大きいのです。さあ、兄弟姉妹と共に、すでに**地の塩、世の光**にさせていただいているのだから、ますますそうになっていきましょう。

**信徒についての
神学的・聖書的展望**

ヘルマン・G・ステンブル

(北尾一郎訳)

アメリカ福音ルーテル教会奉仕局刊

1975年初版

まえがき

信徒と教職とを問わずキリスト者の中で、教会の中だけでなく殊にも日常生活と仕事の中で果たすべき信徒の奉仕について再確認しようとする運動があることは明白な事実であります。ステンプル博士が明らかにしているように、この運動は、霊的また神学的に深いところにその根源を持っており、信徒の奉仕が教会の歴史の中でどのように興隆したか衰退したかについての同氏の叙述は、実に魅惑的なものであります。

20世紀後半になって、多くの会議において示されたことは、信徒の奉仕についての関心の高まりです。例えば、1954年に開催された世界教会協議会第二回大会は、神の世界の中で、また神の世界のために奉仕するようにとの、神の民へのキリストにおける神の召命を明確に表明しようとした。同大会は宣言しています——「事実、教会は、その信徒を通して、こうした領域にすでに存在している」。加えて、中央委員会は大会のあと、次のように表明しました——「こうした概念には何も新しいものはない……しかし、それは、教会史における多くの時代を通じてあいまいにされてきた真理である」。

信徒運動が世界教会協議会からの支持を得つつあったのと時を同じくして、この運動に関する書物が現われてきました。ヘンドリック・クレマーの『信徒の神学』は、最も大きな貢献をしました。1957年には手に入るようになったグスタフ・ヴィングレンの『ルターの召命観』の英訳は、強力な支持を与えました。ドナルド・ハイジズは翌年『キリスト者の召命』を著しました。一方、ドイツにおいては、戦後、クリスチャン・アカデミーが創立され、人々が信仰を日常生活や職業に関連づけるよう援助する働きをしたことが、大きな進展をもたらしました。アメリカ・ルーテル教会（LCA）が「信仰と生活研究所」を創立したのは、ちょうどこのような時であり、時が熟しての出来事でありました。アメリカ・ルーテル教会（LCA）のハロルド・レッツ、またもう一つのアメリカ・ルーテル教会（ALC）のローレン・ハルヴァーセンは、信徒奉仕の分野で、アメリカのルター派の開拓者となりました。加えて、ジョージ・マクレオド、マーク・ギブズ、ラルフ・モートン、J.A.T. ロビンソン、コリン・ウィリアムズ、マーク・ヴァン・デン・ホイベル、そのほか多くの海外の著作が米国で広く読まれましたし、ギブズとモー

トンの言葉を借りれば、「神の凍結された民」を奮い立たせました。期待は脹らんでいました。新しい日は近づいていました。

日常生活における奉仕の運動が引き続き成長し、有効であり続けるためには、私たちの神学的・聖書の展望を常に吟味しつづけることが何よりも大切であります。私たちは、洗礼を受けていること、神の民・キリストの体として召されており、「世界の生のために」私たち自身を献げるよう召されていることを忘れてはならないのです。

初版 1975年

改訂 1987年

信徒についての神学的・聖書の展望

だれも、信徒の役割を肯定することなしに、教会に関して適切に語ることはできません。最近、世界教会協議会が公にした文書は、次のように断言しています——「すべての会員は、共同体の助けを受けながら、自分たちが受けた賜物を発見し、そうした賜物を、教会を建て上げるために、また教会に仕えるために、さらに教会が派遣されている世界に仕えるために用いるよう召されているのである」。ルーテル教会の一つの研究レポートは、このように宣言します——「宣教とは、神が神の民を通して働きたもうものであり、それは世界の生のためになされる働きである。私たち、神の民の全員が奉仕者である！ 私たち、神の民のすべては、世界の中にあるキリストの体である」。

この二つの文章で言われている「すべて」とは、教職と信徒の両方を含んでいます。

しかし、ここでは、御言葉の公的宣言と聖礼典の執行以外のさまざまな奉仕に召されている大多数の神の民の特別な役割に焦点を合わせることになりましょう。そうすることは、教職の本質的な職務を忘れることでも、また矮小化することでもありません。むしろ、それは、キリスト者の大部分を見える存在にすることであり、教職按手を受けた人々によって特別に宣言され提供される神の恵みと真理が、そうした信徒によって世界の生の中に直接に届けられるのであります。

初代教会における信徒

私たちが、「信徒」と呼ばれるグループを、特別な関心をもって選び出す必要を感じること自体、意義深いことであります。新約聖書の共同体は、そうした作業をきわめておかしなことと感じたであらうでしょう。あの古代に行きわたっていた教会構造がどのようなものであったかは、今なお明らかではありませんが、初代には「キリスト者」という“属”の下にある「信徒」という“亜種”は存在しない、とする点では大方の同意があります。事実、「信徒」(laity。新約聖書の用語では laos ラオス＝民)と言うとき、それは「キリスト者」を意味していました。二つの言葉は、實際上、同義語でありました。

「ラオス」は、洗礼をとおしてキリストの体の一員とされた人々を指

す一般用語の一つです。この大きな名称の下で、教会におけるさまざまな職務にしたがって、使徒・執事・長老・監督・教師など、いくつかの名称が用いられました。神のラオスの中のある人々は、特別な機能のために区別され、ほかの人々は、区別されていませんでした。しかし、教会の中で何かの職務を持つことは、それが監督の職務であったとしても、「ラオス」という列からその人を外すことにはなりません。それは、ただ単に、その人が、「ラオス」の一員であって、全体のための奉仕に携わるように区別されているということを意味するにすぎませんでした。

新約聖書による「ラオス」という言葉の古典的用法の一つは、第一ペトロ 2：9-10に見ることができます——

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。あなたがたは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民である」。

この豊かな章句については、多くのことが言われるでしょう。しかしここでは、この節の中で用いられている「民」という言葉の背後にあるギリシア語は、どの場合も、「ラオス」であるということを指摘するだけにしましょう。神の民、新しい種族、王の系統を引く祭司は、職務に関する区別なしに、ただ単純に信徒を意味していました。

アラン・リチャードソンは、新約聖書時代の状況について、次のようにまとめています。

洗礼は、いわば、王の系統を引く祭司の新しいメンバーの授任按手であった。新約聖書の意味における信徒、すなわち「ラオス」の一員としての信徒とは、奉仕の責任を何も持たずに、伝道と牧会という自分の任務を、有給でその任務を果たす専従のキリスト者たちに委ねてしまった（近代の用語で言う）教会員のことでは決してない。すべての信徒は……、この用語を聖書的な意味で用いるなら、イエス・キリストの教会の祭司であり、奉仕者である。また、すべての「奉仕者」は等しく「信徒」である。

この初期の状態は、長くは続きませんでした。ここでは、教会が、信徒に関する原初的な理解から離れていった長たらしい経過を跡づけるこ

とはできません。しかし、まもなく「信徒」は、「キリスト者」という“属”の下にある一つの“亜種”として定義されるようになり、「教職」というもう一つの“亜種”と区別されたのです。

ヘンドリック・クレマーは、「信徒」(laity)と「教職」(clergy)という言葉の世俗的な語源を指摘しました。ギリシア・ローマの都市国家では、ラオス(laos)は一般市民を指す言葉であり、クレロス(kleros)は彼らの行政官を指しておりました。それになぞらえて、教会では、特別の職務に授任接手された人々が「教職」であり、一般のキリスト者たちは、「信徒」として一つにまとめられました。あるラテン教父は信徒のことを「平民」(plebs)とさえ言いました。コンスタンティヌスの下で、ローマ帝国の政府が、以前には異教の祭司たちに与えていたいくつかの特権をキリスト教会の教職に与えるに及んで、そのような格付けへの圧力は、ますます強くなりました。12世紀までには、グラティウスという法律家がいかに単純に「二種類のキリスト者が存在する」と書けるほどになったのです。彼が意味したのは、もちろん、教職と信徒です。こうして、「ラオス」という古い言葉は、その総称的な意味を失ったのでした。

信徒と宗教改革

そのような状況を、改革者たちは受け継いだのでした。それは、「中二階式会堂」の教会論と言えるでしょう。一階には、世界の泥やほこりにさらされ、自分たちの救いはいつも危うくなっており、自分たちの上の階にいる人々からの奉仕に完全に依存する、「信徒」がいました。中二階には、天国に近く、特別に神の恵みを吹き込まれ、悪い世界の腐敗から守られ、下の階にいる「信徒」に礼典(サクラメント)という薬を配る、「教職」がいました。信徒が、その数において、はるかに多数であるにもかかわらず、「キリスト者」属の中で下位の亜種であることは、もはや論じるまでもないことになっていました。新約聖書の教会理解の基礎の上に、奇妙な構造物が建ち上がっていたのです。

改革に向けた運動の一つの結果は、この「中二階式会堂」を取り壊して、「牧舎型会堂」とでも言うべきものを建てはじめることでした。宗教改革の青写真によると、すべてのキリスト者が一つの階で生きることを求めています。確かに、すべての人が同じ部屋にいるわけではあり

ませんでした。さまざまな「事務所スペース」がありました。しかし、神への近さについても、罪からの保護についても、だれ一人ほかの人より高い位置に立つことはなかったのです。教職は、神の前における地位に関してではなく、ただ職務と機能に関してだけ、信徒と区別して見られるはずでした。

ルターの神学的洞察の二つが、この事柄に特別に関係しています。

1. 全信徒祭司性

宗教改革の教理の中で、これほど悲劇的に誤解されまた誤用されてきたものは、ほかにないでしょう。私たちは、いつも近代の西洋的個人主義的な眼鏡を通してこの教理を見てしまうのです。ですから、ほとんどの教会員は、このスローガンを目にするとき、こう考えるのではないのでしょうか——「なるほど、その意味は、私が神の前に私自身である、という意味だ。神への私の祈りを取り次ぎ、神の恵みを私に取り次ぐ祭司が必要だという中世的な考えは、もはや無意味になった。私は、自分で祈り、罪を告白し、神から直接に罪の赦しの保証を私の心の中に受け取ることができるのだ」。ひとりの個人として神の前に立つ高潔なキリスト者、それこそこのような理解が生み出すキリスト者像です。自己中心的な敬虔を強調することと、キリストと結びついた生活に中心的な意味を持つ相互性を土台から壊すことによって、このようなキリスト者像は、会衆の生活に大きな害毒をまきちらすことになりました。

もちろん、ルターはこのようなことを意図していませんでした。そうした個人主義的解釈は、祭司性の意味を事実上否定することです。もしルターがこのようなことを言おうとしたのであれば、「全信徒祭司性」について語ることは一切なかったでしょう。

「祭司」とは、定義上は、神と人間との関係における仲保者、仲介者であります。ですから、ルターが「信徒の祭司性」について語る場合、すべてのキリスト者が神と隣人との間を仲介する役割を果たしている、と言っているのです。祭司たちを教会から除去してしまうのではなく、ルターはむしろ祭司たちを増やしました。教職が独占していた祭司の機能を打ち壊し、仲介の働きをキリストの体のすべての部分に分配したのです。ルターは宣言しました——「洗礼によって私たちの皆が祭司性へと聖別されているのだ」と。

神の「ラオス」は、さまざまな仕方で祭司の務めを全うします。ある人々—教職—は、御言葉の説教と礼典の執行という特別な職務を与えられています。教職は、教会の祭司性の公式な働きのために授任按手されています。しかし、信徒も祭司的な働きを持っています。ルターによれば、信徒は互いのために祈るべきです。信徒は兄弟姉妹の罪の告白と悩みの叫びを聴くべきです。信徒は赦しと慰めを与える神からの喜ばしい御言葉を語るべきです。信徒は、貧しく抑圧された人々に仕えることによって、神の溢れるばかりの善を表わす器となるべきです。要するに、信徒は、互いに対して「小さなキリスト」、すべての人の偉大なる大祭司でありたもうイエスの下で働く祭司たちとなるべきなのです。相互に祭司性を持つという教会の性格を、現代風に表現すると次のようになります——「教会とは、ひとりの飢えた人が、もうひとりの飢えた人にも食物のありかを教えている、そのような共同体である」。

すべてのキリスト者が、洗礼を受けることによって隣人に対する祭司性を与えられるということは、ルターの教えのすべてを決して言い尽してはいません。共同体としての教会が、世界のための集会的祭司性を持っているということも言わなければなりません。ちょうど私たち一人ひとりが、神と隣人との間の仲介者の位置に立っているように、キリストの体全体も、神と世界との間の祭司的位置に立っているのです。

このような祭司性の一部は、取り成しの祈りの奉仕です。初代教会のある指導者は次のように書いています——「キリスト者は、慈しみ深い神の前で、人類のために訴える」。この数十年、市民生活における教会の預言者的で行動的な役割が強調されてきたことは重要でまた必要なことでありました。キリスト者は、抑圧的な勢力の前で率直に審判の言葉を語り、また、貧しく弱い人々の擁護者として立つことの必要性を学んできました。キリスト者は、他の人々と共に平和のために行進し、正義と自由を促進するために彼らと手を携えました。このような祭司性の具体的表現と並んで、教会は世界のために祈るという隠れた働きを続けるように召されています——「そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと取り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るためです」(第一モテ2：1-2)。

祭司性は、祈りにおける人間から神への動きと共に、愛における神か

ら人間への動きを意味しています。教会は、全体としてまた個々の部分を通して、世界のために教会が祈り求める恵みの器として自らを神にささげるのです。これが説教と伝道の意味であり、教会の社会福祉施設を通しての奉仕の意味であり、愛を正義と平和と自由とに置き換える闘いの意味であり、神の民が日々黙々と実践している無数の奉仕の働きの意味であります。すべては、取り成しの祈りと愛の奉仕という上りと下りの二方向の要素であり、教会の仲介的祭司性を構成するものであります。

2. キリスト者の召命

新約聖書とルターは、「召命」という言葉をいろいろな意味で用いています。第一コリント7：20で、パウロは、「召命」に当たる「クレシス」(klesis)というギリシア語を、一節の中で二つの意味に用いています——「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい」。

まず、「身分」というのは、割礼を受けている者が割礼を受けていない者か、奴隷か自由の身か、というように、改宗者がキリスト教共同体に入る時の人間の状態のことです。次に、「召された」という場合は、福音による「召し」のことであり、この福音によって神は人々をそうした人間的差別から解放してくださるのです。これはまた、エフェソ4：1の言葉の力です。そこではパウロがこう書いています——「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい」。

宗教改革の時代が来るまでに、この荘厳な聖書的用語は、きわめて狭い範囲に限られたものになってしまいました。この言葉は、教会の制度や職務の道へ進んだキリスト者だけに限られるものとなりました。司祭や、修道士や、女子修道士だけが「召命」を受けたのでした。信徒には全く適用する必要がなかったのです。またしても、この新約聖書の言葉を再発見し、その意味全体を回復することが、ルターの仕事の一つでありました。

グスタフ・ヴィングレンは、ルターがこの「召命」という言葉を三つの意味で用いたことを指摘します。すなわち、(a)福音の宣言において私たちに届く召集の意味で、(b)職業ないしその人の社会的立場の意味で、そして(c)教会における説教者の職務への召命の意味で。ルターは、

Berufというドイツ語を同じような柔軟性をもって用いましたが、多くの場合、キリスト者の世俗的な立場や職業を意味しています。ルターによれば、非キリスト者は、Beruf (calling 召命) を持っておらず、持っているのはStand (station 立場) だけです。キリスト者も同様に、君主、長官、靴職人、市民、夫、妻、子どもといったStandを持っていますが、神が福音において神の子ども、神の僕として召されたという事実が、StandをBerufに変え、そのBerufを通してキリスト者は隣人に仕えることによって神に仕えるようになるのです。

再び、「二種類のキリスト者」の間の根本的な分離は、克服されました。もはや、教会内の特別なグループ、すなわち教会の職務に選ばれた人々が、「召命」という言葉を占有することはできなくなりました。すべてのキリスト者は、教会や世界におけるその人の職務や立場が何であっても、神の召命の下で生涯を生き抜くことになったのです。さらに、教会の職務は、どんな意味においても世俗の職務よりも上位にあると考えられるべきではありませんでした。どのような職務も等しく、隣人に仕える場、ひいては神に仕える場であり得たのです。熱心な伝道者から、「主に仕えるためにあなたは何をするか」と問われたとき、まばたきもせず「私はパンを焼きます」と答えるような人を、ルターは好ましく思ったのではないのでしょうか。このような事例をルター自身は次のように述べています——「膝をついて床をわざわざ洗っているお手伝いの女性は、聖卓の前に膝をついて聖餐式の司式をしている司祭と同じように、全能の神の目によろこばしいのです」。

お手伝いの女性の仕事が、ルターの目には聖なるものと映るのは、彼女に特有な場所で、隣人に、この場合彼女が雇われている所帯に仕える機会を、神が与えられたからであります。同じように、女主人もお手伝いの女性を親切に正しく扱うことによって所帯に仕えるという機会を与えられたのです。実に、二人とも互いに仕えるという必然性の下にあったのです。

地上の職業は、ルターの二極的な神学構造の中では、律法の領域に属しています。

この世界では、私たちが望むにしても望まないにしても、相互に奉仕する特定の務めが事実上課せられています。靴職人が良い靴を作るのは、ある朝たまたまそうしたいと思いつからではなく、毎日の生活が

その仕事にかかっていることを知っているからです。現代的用語で言うならば、雇主が少なくとも最低賃金を支払うのは、親切だからではなく、支払わなければ裁判所に訴えられることを知っているからです。このように、相互依存と責任という複雑なネットワークを持っている日常の世界は、私たちが隣人に対してどんな気持ちを持っているかにかかわりなく、隣人に仕えることを強いられるような状況に追い込むのです。神の召命は、内的に促されて出てくるようなものではなく、具体的な外的要求をとおして与えられるものであります。ルターはそのことを次のように語っています。

簡単なたとえで話しましょう。あなたが職人であるなら、あなたは自分の仕事場に、自分の手に、自分の心に、「聖書」が置かれていることに気づくでしょう。それは、あなたが隣人をどのように扱うべきかを教え、また説教しています。あなたの道具、針、指ぬき、ビール樽、商売道具、てんびん、はかりを眺めさえすれば、その上に書かれているこの教えに気づくのです。どこを見ても、あなたの目を引き付けることでしょ。あなたが日々扱うものは何であれ、絶えずあなたにこのことを教えるのに小さすぎるものはありません——あなたが進んで聞き取ろうとしさえすれば。あなたはそうした説教に事欠くことはないのです。なぜなら、あなたは、取引、商品、道具、さらに家と土地にあるそのほかの器具の数ほどの説教者を持っているからです。そうした説教者たちは、あなたの顔に向かってこう叫んでいます——「ねえ、あなたの隣人に対して私を使いなさい。その人が自分のものを使ってあなたにしてほしいと、あなたが思うのと同じように」。

20世紀において、私たちは全く異なった状況に直面しています。召命はもはや、教職についてだけ用いる範疇ではありません。今日の問題は、召命が少数の人のために神聖化 (sacralization) されていることであるよりも、むしろすべての人のために世俗化 (secularization) されていることです。召命は、きわめて単純に、職業を意味しています。キリスト者の召命に関するルターの理解の中にある垂直的な次元を意識することなく、私たちは職業 (召命) 相談・職業 (召命) 訓練学校・職業 (召命) 的社会復帰について語ります。ルターにとって、日常的な仕事や務めという小さな世界は、神の広い命令と約束という大きな地平の

中に位置付けられています。今日の私たちの課題は、仕事が置かれている、複雑で、技術的な、多くの場合非人格化された環境の中にいる人々が、それぞれの仕事や職業を神の召命として理解するのを助けることができるかどうか、ということです。数十年前に、J.H. オールドハムは次のように書いています。

キリスト者である政治家・行政官・経営者・技術者・科学者・手工業者は、日常の仕事における選択や行動の中に、キリスト教的意義を見いだすことができるのか、それともこうしたことのすべては、キリスト者の生活と何の関わりもないのであろうか。キリスト者はこうした職業において神に仕えることができるのか、それとも、十全な意味でのキリスト者でありたいと思えば、宣教師になったり、修道院に入ったりしなければならないのか。

ある意味で、私たちは元の場所に戻ってきました。日常の仕事と神の召命に関して、もう一度、「神が結びつけたものを、人間が切り離してしまった」のです。事実、宗教改革の諸教会は、ルターなどが「神学的」用語で表現した事柄を、「实际的」な用語で理解したことはありませんでした。大多数の教会員にとって、「召命」という言葉は今なお、御言葉と礼典の奉仕に入る人々のためにとっておく言葉なのです。「奉仕」という言葉自体、神の民全体の務めというよりは、専門化された教会の職務だけを指して用いられることがあまりにも多いのです。宗教改革者たちの革命的な教会論の「实际的」な結果は、「司祭に支配された」教会を「説教者に支配された教会」に置き換えただけで、そこで信徒はほとんど語られ教えられる御言葉の受動的な受け手にとどまっていると言うヘンドリック・クレマーの考えに反論することは困難です。彼はこう書いています——「信徒は、宗教改革以前とは異なった状況にあるものの、以前と同様に、『対象』にとどまっており、いかなる意味においても『主体』になってはいない」。

このように書いたとき、クレマーはおもにヨーロッパの教会事情を見ていました。

彼の分析がアメリカに適用される場合には、ある種の調整をする必要があります。北アメリカにおいては、多くの信徒が教会生活の中でたしかに主体的に活動しています。

しかし、多くの場合、そのような活動は教会の境内に限られていま

す。信徒は、教会生活の中での「内務省」を形成しました。彼らは、世俗の職業の場で意識的な伝道奉仕をするというよりは、教会制度の内側における奉仕の関連で働いてきたのです。

現代の教会における信徒

ここで私たちは、第二次世界大戦の終結とほぼ時を同じくして起こった、信徒に関する思想と実験の爆発に注目しなければなりません。ヨーロッパにおける幻滅と破壊の灰の中から、時には「信徒ルネサンス」と呼ばれるものが現われたのです。ヨーロッパの教会指導者たちは、戦争が教会の弱さを露呈したことに衝撃を受けつつも、教会が在り得る姿の幻に燃やされて、世界への宣教に携わる神の民総体としての教会という新約聖書的な理解を表現しようと努力しました。開拓的な努力がなされていたいくつかのセンターを訪問したアメリカ人たちは、教会における「新生のしるし」とか「新しい春」とかいう熱狂的な報告を持って帰国したものでした。そうした称賛はおそらく楽観的すぎたかもしれませんが、それでも、あの再起の源泉にあった神学的衝動は、「信徒の再興」に向けての教会の努力に力を与え続けています。この再興の指導者たちは、自分たちの働きのことを次に挙げる三つの神学的原理によって、弛むことなく語ってきました。

1. 世界に対する神の愛の再確認

創造に関する教理が新しい地位を与えられました。教会は、詩編作者と共に、次のように告白することが、何を意味するかを再び学びつつあります——「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」(詩編24：1)。私たちは、ヨハネの福音のカプセルを、正しく読むように改めて教えられています——「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3：16)。すでに述べたように、この節は「神は……教会を愛された」と言うてはいません。ところが、私たちは教会の事柄に気を奪われて、経済的・政治的・文化的な事柄をおろそかにしたり、さらには無関係だと考えたりすることによって、そう読んでいるように見えることが多いのです。アメリカの信徒運動の草分けであったキャメロン・ホールは、平均的な会衆が世界に対して「無言の扱い」をしていると言ってこぼしたものです。典型的な教会の週報に記

載されている行事予定の一覧を調べれば、週報が省いている事柄によって、示唆していることなのですが、信徒は「教会的」関心だけを持って日曜礼拝や週日の集会に出席しているように見えます。それはまるで、昔の西部開拓地の酒場に入るとき、来客が銃を預けるように求められたのと同様に、信徒は会堂に入るとき労働の日々の生活についての「この世的な」思いをすべて玄関で預けることになっているかのようです。

しかし、明らかなことは、聖書的な観点から見れば、聖と俗とのどのような分離も全く一方的なものであり、後者を損なう形の聖俗の区別は、すべて異端的です。世界は、神の「初めの愛」であると言われてきました。神が天と地とそのなかのすべてのものを創造されたとき、神はそれらをご覧になり、「極めて良い」と宣言されました。

そして、神の創造の冠である人類が、園をジャングルに変えようとしたとき、「第二のアダムは闘うために、助けるために来られた」のです。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1:14)のです。受肉とは、私たちのこの世俗的、地上的な生活こそ、神のリアリティーのために選ばれた住まいであることを意味しています。神は、ユダヤの農民の娘の子どもとして生まれ、長じてはほとんど村の大工として生活されました。ある新約聖書学者がその情景を次のように描いてくれました。

この方は、森の普通の労働者で、単純な、田舎で働く男であった。この方は、労働者の生活の仕事と煩いを、戦争の恐怖を、貧困の苦悩を、失業に付きまとう恐れを、何年も続く干ばつの不安を、凶作の恐ろしい亡霊を、富裕な雇い主の傲慢を、成功した商人の冷酷な無情を、ご存じである。この方の生計は、最も単純で粗末な道具でなされる激しく辛い労働によって得られたのである。

受肉の在り方が**この世界を肯定している**ということは、この著者の論点ではなかったにしても、私たちの論点には合っています。男女がコンピュータを扱い、しびんを空にし、食事を作り、畑を耕し、クルマを売り、道路を設計し、文書をファイルする、この世俗の領域は、神の絶えることのない活動の舞台であり、従って私たちの神への奉仕の場所であります。

2. 世界への教会の宣教

ポール・ミネアは、『新約聖書における教会像』と題する研究の中で、最初のキリスト者共同体の自己理解を表現しようとした80余の言語描写を吟味しています。驚くべきことに、そうしたイメージの大半は外向きであり、外的指向であるという事実です。塩・光・パン種・ぶどうがその例の一部です。それぞれ自分を費やすことによって自分自身を実現します——塩は味を付けたり保存したりすることによって、光は照らしたり暖めたりすることによって、パン種はこね粉を膨らませることによって、ぶどうはぶどうの実を結ぶことによって。

この点を強調しすぎる必要はありませんが、教会がそれ自身のためではなく世界のために存在すること、さらには、世界の中でのまた世界のための神の宣教のために存在するということは、聖書から見れば明らかです。ヘンドリック・クレマーの言葉で言えば、「教会はそれ自身が目的ではなく、目的のための手段である」。すなわち、教会は神の目的の終点ではなく、道具であります。

エフェソの信徒への手紙の著者は語ります——神の目的は「キリストにおいてお決めになった」ものです（1：9）。ある人が言ったように、イエスは「他者のための人間」でした。この表現はもちろん、イエスについて教会が言う必要のあるすべてではありませんが、イエスの地上の御生涯がその最初から最後まで外に向かって開かれていたという事実を強調しています。出し惜しみされたものは何もありませんでした。イエスのご自身を与え尽くされました——貧しい人々に、孤独な人々に、疎外された人々に、ひいては全世界のために、十字架の上でご自身を与えられたのです。それですから、重要な自己イメージの一つとして「キリストの体」という表現を用いる共同体は、「他者のための教会」以下のものではありません。

世界におけるキリストの体を構成する私たちが、その本当の在り方をいかに悲劇的に裏切ってきたかを、教会生活の中心近くに立っている人々は、誰よりも良く知っています。自分たち自身の壁を越えて見ようとは決してしない個々の教会や、自己保存に取りつかれた施設や機関が、あまりにも多いのです。それでもしかし、現代における再生運動の永続的な貯えは、教会の内側における休むことのない良心の種蒔きでありました。私たちが快適で自己陶酔的な姿勢を取ることは、ますます困

難になっています。神が教会を世界の中でまた世界のために召し出されたことを思い起こさせる声が、しばらく前から現在も、あまりにも多く聞こえるからです。このことは、「信徒ルネサンス」において指導的であった人々の働きを支えてきた第三の原理へ直ちに導くのです。

3. 信徒は世界の中での、また世界のためになされる教会の宣教の先頭集団である。

教職はそのような先頭集団ではありません。教職の正常な職業上の住みかは教会の中にあります。その本来の仕事は、「陣営の内側」にあり、教育、説教、礼典の執行、そのほかの関連活動です。平日に世俗の仕事に職業的に携わることは、教職の特質ではありません。「労働司祭」はこれからも稀なケースであり続けるでしょう。

教職授任接手を受けていない人々にとっては（比較的少数の職業的教会職員を小さな例外として）状況は逆になっています。その住みかはさらに完全に世俗の世界です。信徒はそこで働いています。信徒はそこで遊んでいます。信徒は、さまざまな状況にある人々と共に地域の団地に住み、彼らと共に広範で多様な努力に参加しているのです。信徒は自然にできている橋であり、それによって聖堂から市街へと動きが伝わるのです。信徒は世俗的（profane。字義的には pro-fanus「寺院の前」）なキリスト者です。信徒は、歴史におけるこの瞬間、神が愛しておられる世界に触れている、多くの部分から成るキリストの体です。信徒は、これ以上一步を進めるまでもなく、シモーン・ヴェイユが言うように、「あらゆるキリスト教的なもの、あらゆるキリスト教的でないものとの間の交差点に立っています」。この混雑している十字路における信徒の奉仕は、その普通の生活を通して、キリストが贖うことを求めておられるこの世界に対してキリストを代表する（represent。字義的には represent 再び差し出す、紹介する）ことであります。このように、奉仕の形はいろいろであっても、信徒は、礼典的で証言的な奉仕を持っているのであり、それは、説教壇に立ち、洗礼盤と聖卓のそばで司式する、教職接手を受けた兄弟姉妹の奉仕と共にあるものです。

この見方は1954年エヴァンストンで開かれた世界教会協議会大会に提出された信徒に関する報告書に表明されています。その報告書は、数十年前のものですが、教会が神の民のすべてを世界における宣教と奉仕の

ために解放する道を探し求めるときに、今でも一つの水準点として立っているのです。

信徒の奉仕を、世界において、明白で可視的で活動的なものにするべき時が来た。信仰の現実の闘いは、今日、工場や商店やオフィスや農場で、政党や政府機関で、無数の家庭で、新聞やラジオやテレビで、国際関係で、闘われている。度重ねて、教会は「このような諸領域に入っていく」べきであると言われているが、実際には、教会は既にその信徒の人格において、このような諸領域の中に「居る」のである。

あとがき（LAOS 講座創刊号「信徒として生きる」）

- 信徒が洗礼を受けた後、生涯にわたって成長していくための運動を起こしていきたい、その具体的な手助けをしていきたいとの願いから、この「LAOS 講座」は企画されました。「LAOS」は神の民の「民」を表すギリシャ語であることは冒頭に記しましたが、また Laity（信徒）Advancement（成長発展）Ongoing（継続）Seminar（セミナー）の頭文字でもあります。
- 個々の教会でこれを使っての学びをどのように展開していくか、その仕方は当然それぞれの教会に委ねられます。この創刊号は、全体の基礎になる信徒論ですが、それに続く「第一期」八単元（「LAOS の樹」参照）またその後の「第二期」は必ずしも刊行の順序にこだわらずに、個々の教会の関心の度合いや差し迫った必要性の高さに応じて、自由に選ばれて結構です。
- しかし、冒頭の「LAOS 講座へのお招き」に記しましたように、できるなら個人で読んで学びを深めるだけでなく、教会の兄弟姉妹と一緒に読み、語り合い、理解を深め合い、共に信徒として成長していくことができるのがもっともふさわしいでしょう。どうか、さまざまな工夫をなさってください。また、それぞれの学びの成果を全体教会にも分かち合ってくださいとありがたく思います。その反応が、「第一期」「第二期」の教材作りにきっと反映されていくことでしょう。
- 「誰だろう、何だろう、信徒って」は PM21 の第 2 プロジェクト委員会のなかで、江藤直純委員長（日本ルーテル神学校長）が草稿を執筆し、委員会で推敲し、また〈話し合いのために〉を加えました。「信徒についての神学的・聖書的展望」は姉妹関係にあるアメリカ福音ルーテル教会（ELCA）で発行された冊子を、2003 年のルーテル宣教協議会（LCM。日本福音ルーテル教会と海外のパートナーとの宣教協力機関）の折にいただき、第 2 プロジェクトの委員のひとり、北尾一朗牧師（大岡山教会）が翻訳しました。
- この講座は、山之内正俊 JELC 議長を総責任者に、徳弘浩隆宣教室長を推進委員長に取り組んでいる「JELC 宣教方策 21」別名パワーミッション 21、略称 PM21 が各個教会の信徒の皆さんに大規模に直接関わる最初の企画です。神さまの導きと祝福をいただいて、教会で用い

られることを切に願っています。

2004年3月

「PM21」第2プロジェクト（証し・奉仕する信徒）

LAOS 講座 創刊号「信徒として生きる」

- 発行日 2004年3月20日 第1刷
2007年4月2日 第2刷
- 編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
委員長 齋藤未理子
- 著者 江藤直純
- 発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」(PM21) 推進委員会
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆
- 発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話：03-3260-1908 FAX：03-3260-1948
e-mail mission04@jelc.or.jp
- 印刷 精文堂印刷株式会社
-



